

## 「女性の20代」研究序説

—そのライフコース論的・ライフイベント論的考察にむけて—

工 藤 保 則

女性、中でも特に地方出身で都市の大学に進学した者は、「社会」と「個人」、「地方」と「都市」、というふたつのはざまに悩む存在である。そのような存在である地方出身の女性の20代について、筆者は本稿を出発点として、今後、継続的に、そのライフコース論的、ライフイベント論的考察を進めていこうと考えている。

本稿は、いわば、筆者なりの「女性の20代」研究の序説である。1節・2節において、本研究に取り組もうとしたきっかけや今後の研究計画を述べた上で、3節では、具体的に「地方出身で都市の大学に進学した女子学生」3人のインタビューを示している。それらをうけて4節で、「20代の女性の等身大の日常」について考察する意味・意義について述べている。

キーワード：ライフコース、20代、地方

### 1. はじめに

私たちの人生を10年単位でくくっていうとすれば、10歳頃までは「子ども」期であり、そこは「(生まれた) 家族」との関わりが大きい時期である。10代は、「子どもからおとなになっていく時期」であり、そこには「学校」が大きく関わってくる。次の10年の20代は、「おとな」になっているかどうかは別としても、それまでの「(生まれた) 家族」や「学校」からはなれて「社会」へ入り、そして「社会」での自らの定着をはかる時期ともいえる。

本稿で、20代の女性に注目するのは、「社会」—それを「学校」にかわる新しい環境としての「会社」で考えるとすると、そこはまだまだ「男社会」である—と、結婚、出産などといった、ある意味「個人」としての(あるいはまた、「つくる家族」としての)出来事とのはざまに悩む存在が、20代の女性だと思われるからである。また、その中でも、地方出身で都市の大学に進学したものを対象としたのは、彼女らは、地方と都市とのはざまでも悩む存在のようにも思われるからである。つまり、地方出身の20代の女性というのは、二重の意味ではざまに悩む存在だと考えられるのである。

そのような存在である、地方出身の20代の女性について、筆者は本稿を出発点としながら、今後、継続的に、そのライフコース論的、ライフイベント論的考察を進めていきたいと考えている。

## 2. 女性の20代をとらえる視点

筆者が1節で示したような地方出身の女性の20代研究にとりくもうと思ったきっかけは、吉川徹の『学歴社会のローカル・トラック』(吉川徹2001)に刺激を受けたこと、またそれにより筆者自身が「地域性とライフコース展望」についての小論(工藤2004a)を書いたことによる。以下に、それぞれの内容の簡単な紹介を行う。

『学歴社会のローカルトラック』は、ある地方の公立高校における国公立大学進学クラスの生徒の、卒業後6年間の青春を描いたものである。まず最初に研究の対象となった島根県立横田高校の位置する仁多郡の地理的・社会的特質を示した上で、「ショート・ライフヒストリー」や「計量的モノグラフ」という手法・視点を活用しながら、地方の高校生の大学進学、および大学卒業後の職業選択における、地方特有の実態を言語化して説明している。その過程で、研究のオリジナリティを際立たせる「ローカルトラック論」が示される。吉川は「若者たちの進路選択について最終的に整理しようとするとき、ノン・メリトクラテックな、つまり進学先の難易度や学校歴の威信レベルとは関係のない進路分化に注目する」ことの重要性を説き、「地方県において、アカデミックトラックを補完する異なる次元の水路づけ」のことを、トラッキング理論の枠組みにのせて「ローカル・トラック」と呼んだのである。この研究は、トラッキング研究に、新たな視点を提示したものとして高く評価されている<sup>1)</sup>。

「地域性とライフコース展望」は、地域性の観点とライフコースの観点を重ね、そのふたつの交差したところで現在の中学生の姿をとらえようとしたものである。上記した吉川の「ローカルトラック論」は、これと似た観点のものであるが、それは一地域としての地方(local)の生徒のライフコースを見ているが、これは都市に対しての地方(provincial)の生徒のライフコース展望を見ようとしたものである。

「地域性」「ライフコース」から中学生に接近するために、都市と地方の中学生を対象として実施した質問紙調査のうち、主に「職業意識」項目と「ジェンダー意識」項目の分析を行った結果、次のような知見が得られた。

- ・都市の中学生は、つきたい仕事 that 明確でない者が多いが、明確な者の中ではつきたい職業の多様性が認められている。また、職業観については、相対的に「職業忌避感」が強く、「一生の仕事志向」が弱い。一方、地方の中学生は、都市とくらべるとつきたい仕事 that 明確である者が多いが、明確な者の中ではつきたい職業の多様性は都市ほどはみられない。また、職業観については、相対的に「職業忌避感」が弱く、「一生の仕事志向」が強い。
- ・とくに女子において、都市では自分のライフコースとしては親世代の典型的な働きかたである「中断再就職」を展望することが多いが、地方では、地域における女性就労率の高さを反映してか、「継続就労型」を志向する者が多い。

本節はじめに「きっかけ」と書いたように、このふたつの研究に、そしてその交わったところに、本稿を出発点として、筆者がこれから取り組もうとしている課題がある。吉川のものは「地方の高校」の同期卒業生の、そこから先の分化をあつかったものであるが、筆者が取り組もうとしているのは、それぞれちがう地方出身で都市の大学で同じ専攻に属した<sup>2)</sup>女子学生の、そこから先の分化をについてである。大学卒業後の地域移動としては、地方に帰る(Uターン)、都市に定住する、あるいはそれ以外、といった移動があるだろう。また、移動した先のそれぞれの地域での働き方(中断再就職、継続就労)や意識(職業忌避感、一生の仕事志向)にも、いろいろ

な特徴があるだろう。そこには、同じように高等教育を受けたのだが、地元、つまり地方にのこって大学に進学した者とはちがう、都市と地方のふたつの空気を知っていることによる、考え方や身の振り方の特徴があるかも知れない。

それらについて考えるために、平成15年度に大学3年生（21歳）であった女子学生を、これから10年間おいかけるつもりである。

### 3. インタビュー調査から

ここでは地方出身で都市の大学に進学した女子学生3人のインタビューを示す。インフォーマントはそれぞれ、石川県小松市、福井県福井市、岐阜県岐阜市、出身であり、その土地で高校卒業まですごし、大学進学（同志社大学文学部文化学科教育学専攻）のために都市（京都）に出てきた3人である。彼女らに対して、3年生のおわりの春休みに、個別にインタビューをおこなった。インタビューの内容は、主に、小中高生時代のことについて（地元の環境についても含む）、大学生活について、就職について、5年後・10年後の自分について、等である。なお、インフォーマントの氏名など固有名詞は一部、変更してある。

#### 1) 広部理華（平成16年3月31日インタビュー実施）

##### プロフィールと小中高生時代（地元の環境）について

石川県小松市出身です。父は普通のサラリーマンで母は小学校の先生です。きょうだいは弟がふたりいます。わたしは長女なんです。小学校の頃は何もできなくて、3段階評価のABCのCをもらってくるような子でした。でも中学校のまわりの友達がわりとがんばる子たちだったので、引っ張られて勉強するようになって、高校は進学校の小松高校に入りました。

高校の時は、学校の行事は積極的に参加して、体育祭なんかも応援リーダーとしてみんなと盛り上がり、とても楽しかったです。高校に入学したときの成績が良く、最初の懇談会で母はとてもほめられたらしいんですが、1年生の終わりの時に行ったら、ぼろぼろに言われて帰ってきました。そんな感じで1、2年生は成績が悪かったんですが、3年生になったら目の色を変えて勉強し始めて、なんとか希望どおりの大学に進学することができました。

##### 大学進学について

大学受験は、国立は千葉大学教育学部の生涯教育を受けて、受かりました。その時は生涯学習とか社会教育に興味があって、地域と教育との結びつきを勉強したかったんです。私学も同志社と関西大学の教育系を受けました。地元では国公立がいいっていう先入観がすごいあって、「どうして千葉大にいかなかったの」ってみんなに言われるんですが、その中で同志社に進学したのはキャンパスがキレイだったのと、お父さんが「同志社のほうがいいんじゃないか」と言ったからです。

高校の頃は20代、30代のことなんて全く考えてなくて、ただぼんやりと「県外には出よう」と思っていました。お母さんが「そういう機会を与えてあげるし、外を見てきたら」と言っていて、「そのとおりだな、ひとり暮らしもしたいし」と単純に思いました。

##### 大学生活について

大学に入ったばかりのときは、同じ高校から進学した子は全然口もきいたことのないような子ばかりで、友達もいなくて寂しかったです。実際、同じ高校から来たうちのひとは寂しくてや

めっちゃったんですよ。その子は週末になる度に実家に帰っていて、気がついたら3カ月でやめてしまっていて、次の年に金沢大に入り直したみたいです。でも、わたしはドイツ語のクラスに恵まれて、そこでの友だちと結びつきが深くなって、そのおかげでなんとか寂しくなく過ごせたかなって。

1年生のときはおもしろい授業はあまり見つけられなくて、要領もわからなくて、がんばろうにもがんばれない状況で、成績もよくなかったんです。「やばい」と思って秋頃からがんばりだして、その頃から授業もおもしろくなってきて、本腰入れて勉強し始めたのは2年生の頃からですね。教職は1年生のときは本当におもしろくなくて、「嫌やな」と思ってたんですが、2年生から教育法のいい先生に巡り会えて、「先生になるのもいいな」と思ったりしてました。

3年生の春学期はすごくしんどくて、しんどいから余計にしっかり取り組んでいたなというのがありましたね。サークルも3年の夏合宿で引退だったので、それにも力を入れて、勉強の方も春学期で44単位取らなければならなかったの、いっぱいいっぱいバイトもできなくて、でもいそがしい分、充実していました。1限から7限まで授業に出て、課題をやって、また次の日1限から授業に出るというような生活が続いていました。春がしんどかったぶん、秋は拍子抜けしてしまって、それが見事に成績にも反映されてしまったので、4年生はがんばろうと思います。

#### 就職について

高校のときの友達の半数は地元に残っています。私の高校は、ほとんどは金沢大を目指すんですけど、ダメだった子は富山や福井とかに散って、この北陸3県に残った人以外が東京などに出ていってという感じです。地元に残った子は残った子で就職について迷ってますね。地元志望の子はUターンの子も含めて、公務員を狙ってるんですよ。で、こんなに倍率が高くて受かるのかという単純な悩みから、彼氏が同じ金沢大学にいて、彼氏は滋賀出身で地元に戻って公認会計士になろうとしていて、自分が石川県で公務員になってしまったら、滋賀と石川でどうなるんだろう、とかですね。あと、金沢大を出て、大阪で就職するっていうことがまれな例とされているところがあって、地元の大学を出たら地元でしか就職できないから難しいと考えているようです。

大学進学で地元を出た子は様々ですが、わたしは「帰らないでいろんな地方を見ていこう」と考えて総合職希望なんです。でも、わりと近畿に出てきている子はUターン志望の子が多いんですよ。近畿の大学を選んでいて、電車一本で帰れるところに出てきているから、地元が近いっていうものもあるのかな。

東京に出てる子では、わたしの一番仲の良い子が上智に行ってるんですが、マスコミ・出版社志望で就職活動がんばってます。「地元に戻る気はない」と言ってますね。地元では女の子は一般職しかないし、例えば大阪で就職したら、他の会社に転職するとかもアリなんですけど、地元ではそれはあり得ないんですよ。本当に慎重に職を選ばないと、その後の可能性が狭まってしまうような気がします。それでわたしも「就職するならこっちな」と思いました。

わたしはずっと教職と就職とで悩んでたんですが、最終的に「教職はやめよう」と思ったのは、お母さんと話したからなんです。実は、お母さんと、弟を甘やかすすぎだということでよくケンカになるんですが、上の弟は高校で部活をがんばってやったんですけど、そのことでお母さんに犠牲を強いてきたところがあるんです。部活をがんばったということだけで「やったった感」を持って、他のことは何もしなかった。勉強ももっとやればできたはずなのに、最初は金沢大の教育学部を目指していたのが、富山大になって、上越教育大になってとだんだんレベルが落ちてるんですよ。お母さんは「あの子を選んだ道やから応援するよ」と言うんですけど、妥協で選ん

だ道でも努力して選んだ道と同じように同じ条件で応援するというのが、不思議な気がして、「お母さん、それは努力して選んだんじゃないくて、妥協で選んだんだから、甘やかしたらダメだ」って。

自分がお金をもらってて言うのもなんですけど、そもそも弟が私と同額の仕送りをしてもらっていることが納得いかなかったです。だって、北陸の地方都市と京都とでは生活費だってぜんぜん違うし、男の子は少々環境が悪かったって住めると思うんですよ。それで、「どんな部屋にしたん」って聞いたたら、「あんたよりちょっと広い部屋で家賃は5万」って。「はあ」ってなりましたよ。だって上越で男の子だったら、そんな家賃の家なんてあり得ないじゃないですか。でも、お母さんは公立の学校の教師として、ずっと公立にいるなかで、昔からある公立の平等感が植え付けられた人なんです。私とは、平等の感覚が全く違うんです。教員でいるとそういうふうになってしまうのかなって考えて、それで「学校に入るのはやめておこう」と思ったんです。

3年生の12月くらいのときに早くから就活をはじめた子とたまたま出会って、その子に刺激されて私も就活モードに入って、それから一心不乱にやりはじめました。就活のはじめの頃は食品関係がいいと思っていて、最初に行ったのもタマノイ酢というお酢の会社だったんです。初めて受けた会社なのに運よく最終の一手前まで行って、学力テストで落ちてしまったので、悔しすぎて、それから問題集を必死に解きました。その後も食品会社をまわっていたのですが、まわるにつれて「ちょっと違うなあ」と思い始めて、ちょうどその時に友達のお姉ちゃんにMRをしている人に、「性格的にもできるんじゃない」って言われて、ちょっと見てみようと思ったたら確かにあってたんですよ。営業職なんだけど誠実に行動することが求められる仕事だし、自分が働くことが患者さんの力になると思ったたらやりがいがあるじゃないですか。それで「MRだ、天職だ」って思ったんですが、最近はその気持ちも落ちだして、「向いているのかな」と思って揺れてます。

わたしの企業選びは、人の健康を応援できる会社を受けたいというのがありますね。人が老いていくなかで「健康でありたい」とか「美しくありたい」と思うことは、向上心だと思うんですよ。そういう気持ちを自分も持っていると思うし、それを応援できる側にまわられたらいいかなと思ってます。そんなこと、高校のときには全然考えてなかったことですけどね。

みんなは「子育てのこととか考えたら、そんな仕事にはつけない」って言うんですけど、わたしは逆に「そんなことを考えたら職業は選べない」って思うんです。単純に子育てのこととか考えていなかっただけっていうのはあるんですけど、最後に残るのは自分だと思うから、今は純粋に自分のやりたいことだけを考えて、それから結婚とか子育てがついてきて、うまくいけばいいなって考えています。でも、みんなの話を聞いていたら、考えるべきなのかな、大事な問題だよなとは思いますがね。ただ、そんなこと考えてたらMRなんて受けませんよね。全国転勤で飛び回らないといけないし、時間も不規則だし。転勤とかについてはいろんな考えがあるとは思いますが、会社にそういう機会をもらわなければ、全く知らない土地に行って住むなんてこと、できないじゃないですか。いつか東京にも住んでみたいし、色々な土地に住むのも若いときにしかできないかもしれないし、逆に会社の転勤を利用して、そういう体験をしてみたいっていうのがあります。

就活していて感じるのは、自分は思っているよりも頭が悪いなってことです。人にものを伝える能力がないなって。就職では全部理由づけられないとダメな部分があるでしょう。普通は自分がやりたいことにやりたい理由があるだけで、その理由にさらに理由があるわけじゃない。何もか

もをそこまで掘り下げて考えて考えていないじゃないですか。性格的なものもあるかもしれないんですが、面接をしていると「そこまで掘り下げられても……」ということがよくありますね。面接官は「今までの人生には全部一貫性があるはずだ」という視点で聞いてくるんですけど、中学生の頃に考えていたことなんて、今とぜんぜん違うじゃないですか。「そんなふうに言われても困る」というのが本音だけど、それを言ったらきっと落ちるんですよ。正直に言って通れば楽なのによって思います。

就活はおもしろいですよ。でも最近、おもしろいって思えるほど余裕がなくなってきたのが正直なところですね。企業によっていろいろあるんだなっていうことも実感しますし。製薬でも、外資系と内資系は違って、外資系は社員の人は兵士みたいなんですよ。会社の歯車っていう感じで。でも内資系はまだ自分のやりたいようにやっている感じがして、できれば内資系がいいですね。大きいところも受けたんですけど、そこは合わないなっていうのを感じて、今は中堅のところが多いですね。どういうところが合わなかったかっていうのは、わたしはドクターとの信頼関係がMRの基本だと思っているんですよ。でも人事の方は「それはもちろんだけど人間関係で得られる利益は伸びない、専門性をつけたら伸び続けるけど、人間関係では頭打ちがあるから、うちは専門性を追求していく」って。わたしは、それは違うんじゃないかなあと思いました。約5年後、10年後、近未来の自分について

25歳の自分は、近畿じゃないところでMRをばりばりやっていると思います。赴任先で仕事一直線でやっているはずですよ。その頃はまだ結婚をしていないと思います。そんなことを言っていたら30歳になっても結婚していなさそうなんですけど。転職のローテーションが3年から5年の会社が多くて、二地域くらい経験してから結婚したいなと思っているんです。あと、結婚してMR続ける人は少ないんですけど、もし相手が近畿とか東京だったら、内勤でいうか、管理側にまわって続けられたらいいなと思いますし、自分が実力をつけて会社がやめられたら困るような人になっていけば、引き留めてくれるかなと思っているんですけど。そう思ってがんばろうかなと思っています。

30歳はさすがに結婚したいです。子供もいて、でも仕事は絶対にしている。仕事はやめたくないですね。お母さんを見ていても、働いていて大変だなと思うんですけど、自分の楽しみが子供しかない生活も嫌だなと思います。全然知らないのにこんなこと言うのもなんですけど、わたしは1回社会に出てから勉強し直したいという希望があって、今まで学んだことと、社会に出てから学ぶことと、違うことに興味を持つかもしれないので、現実を見て勉強し直せたらおもしろいかなと思っています。そのために大学があると思うし。

21歳っていう今は、これまでの自分を振り返って、そこから自分の合った道に進もうっていう分岐点だと思います。大学に入って考えだしたことってそれまでとは全然違うなって思うし、それと同時に、親元を離れて、家庭の影響って本当に大きかったんだなって今さらながら思うし。そんなことを考えながらも、今はとにかく就職が決まるのかなという不安が一番ですね。

## 2) 青木理恵 (平成16年3月28日インタビュー実施)

### プロフィールと小中高生時代 (地元の環境) について

出身は福井県福井市で、藤島高校から自転車で10分くらいの住宅地です。家族は両親と兄と弟で、父は医者をしています。兄は小松市にある会社に今年から勤めていて、弟は大阪にある医科大の学生です。一浪して入って、2年生になるところです。

福大の附属幼稚園が家の近所にあったので、そこに通って、そのまま小中と福大附属の学校にありました。やっぱり環境がよかったし、いじめもありませんでした。男女仲もすごく良くて、席順も男女2つ机をくっつけて座るような配列でした。高校でその話をすると「信じられない」って驚かれました。いまも毎年2回くらい、クラス全員で集まったりしています。そういう人間関係に恵まれたのは、本当に良かったです。

わたしは、小学校の時、クラスでは第二の先生みたいな存在だったんですよ。いま考えると「固かったなあ」って思うんですけど、委員長系をやったりしていて、気が強くて、不正を許さないっていう感じでした。例えば、あめとかガムとか持ってきてはいけないルールだったんですけど、持ってきている子を見つけると、帰りの会の班からの一言で班長さんが発表するとき手を挙げて「だれだれ君がガムを食べてました」とか言っていたみたいです。

小学校ではなんでも1番になりたくて、小学校3、4年生くらいで漢字のドリルを仕上げるようなことでも、すごい頑張っている男の子がいて、その子とどちらが一番に仕上げるか競い合っていたようなところがありました。あと先生が賞状みたいなものを宿題ごとにくれるんですけど、それを集めて優越感にひたっていたりとか、とにかく競争心がすごい、勝気な子だったと思います。

中学校に入って、丸くなったと言うか、やる気を失って「つまらないね」みたいな発言をしたり、表立っての反抗とかはないんですけど、思春期特有のそういう態度がありましたね。髪の毛も薄く茶色にしてみたり。友達数人もそんな感じでした。あくまでばれない範囲での茶髪なんですけどね。学校生活は、バレー部一色でした。わたしがキャプテンになってから朝練もはじめて、その時もすごく厳しいキャプテンだったと思います。小中と仲良かった子は、福井大学とか福井医科大とか割と地元に残っている子が多いですね。

福大付属は高校がないので、藤島高校を受けました。90何パーセントの人が藤島高校を受けたので、選択の余地がなかったです。私学は仁愛と北陸を受ける子が多くて、藤島高校はそんなにたくさん受からないので、半分くらいが私学に進学しました。

高校が一番楽しい時期でした。サッカー部のマネージャーをしていたんですが、夏休みも毎日練習があつて3年生の春まで続けました。部活は楽しかったですね。あと、友達関係が深くなって、放課後とか教室に残ってよく語っていたんですよ。家族とか社会とか勉強についてとか色々なことを話して、本音でけんかみたいに話せるというのも高校に入ってからできるようになったことだったので、人間関係に恵まれていたと思います。

勉強はいつも、入学時が一番良くてだんだん落ちていくタイプなんです。高校も高1の時はそこそこ上位だったと思うんですけど、徐々に落ちていきましたね。といっても、そんなに悪くなかったと思いますが。

#### 大学進学について

最初、高校に入ったころは心理学に興味がありました。でも、その頃はまだ偏差値だけで大学を見ていたので、同志社はそのときに調べて「あ、京都か、いいな。偏差値もけっこう高いんだ」と思ったのをおぼえています。とにかく家を出たいと思っていたので、とりあえず県外の大学を考えていました。家を出たかったのは、親がかなり厳しくてそれから自由になりたいと思っていたからです。行けるところでいいかなという感じだったので、あんまり深くは考えてなかったんですよ。

でも、私立志望だった気がします。模試で志望校を書きますよね。立教とか学習院を書いてい

た覚えがあります。だから東京に行きたかったのかも知れませんね。高校3年で志望校は東京学芸大とか学習院とか立教を考えてましたね。学芸大を考えていたのは、それまでに会った先生が皆ステキだったので、先生という仕事に強いあこがれをもっていただけからです。

同志社を指定校で取っていたので、12月には進路は決まっていた。あまり悩まずに軽い気持ちで決めたところがあって、受かったら行かないといけないというものだったので、あっさり決めました。そうそう、センター試験も受けました。それは、指定校で決まっている人もセンター試験を受けるように、でも国立大学は受験してはダメ、と学校で決められていたからです。

教育専攻にしたのは、家庭裁判所の調査官という仕事にあこがれていたからです。高3の夏くらいに働いている先輩を囲んで語る会があって、いろんな先輩と会ったんですね。そのときに家裁の人が来ていて、その職業を知りました。そのころ心理学熱が冷めかけていたんですが、家裁調査官を調べていくうちに、心理学か教育学か法学かどれかを学ばないといけないことがわかって。それで教育系にいけば、教育も学べて家裁調査官の道もあるので、同志社の教育に行くことにしたんです。20代、30代の生活のことまでは考えていませんでした。家裁調査官とか公務員になって、というような仕事のことだけしか考えていなかったような気がします。

#### 大学生活について

大学生活はひとり暮らしを始めたことが大きかったかな。同じ高校から進学した子もいなかったし、最初は本当にひとりで、すごくさみしかったですね。入学したてのころに39度くらいの熱が出て、そのときが一番しんどかったです。友達も誰もいない状況で風邪をひいて、頭もフラフラで、それで親のありがたみを感じたりしました。友達は教育専攻の子とか、最初の頃入っていたバレーボールのサークルの子とかと結構仲良くなって、泊まりに来たり、交流もふえてきて、次第にさみしさはなくなりました。1年生の時は家裁調査官のこともあんまり考えてなかったし、とりあえず大学生活に慣れるのに精一杯でした。

2年生は春から南青少年活動センターでの活動を始めて、週1だったんですけど、すごく楽しかったです。わたしがしていたのはフリースペースという居場所づくりで、通信制高校の子が来ていたり、学校に全く行ってない子が来ていたり、そういう子と土曜日1日を過ごして、ちょっとした先輩として話をするので、「何か感じてくれたらいいね」、「居場所があることを感じてくれたらいいね」というスタンスで活動していました。でも、大学とは全く別の人たちと会うという場になったし、自分にとっても居場所になったのかなと思います。参加している人の中ではわたしが一番下のことが多かったです。4年生や院生のスタッフの人の就職活動の話なんかを聞いていたら、だんだん、自分の将来のことを考えるようになっていきました。そしたら、「そういえば家裁調査官って言ってたな」というのを思い出して、調べだしたらそれに似た仕事として法務教官に突き当たったんだと思います。それでたいへんそうだけどやりがいがありそうと思って、それ用の勉強を始めようかなと思ったんです。

専門学校に行き始めたのは2年生の10月、11月くらいだったと思います。法務教官も教育学と心理学と社会学の専門の試験と教養の試験があって、専門学校で相談したときに、「法務教官だけじゃなくて国家Ⅱ種とか他の公務員も考えるんだったら、教養を高めた方がいいかもしれない」と言われて、それなら2年生のあいだに教養をやっておいて、3年生から国家Ⅱ種や法務教官の専門の勉強をしたらいいなと思いました。でもね、なんか本気になれなかったんです。毎日行ってたんですけど、こなしているって言うか、回数をどんどん入れて、予約を入れてやってるんですけど、時間割をこなしていただけたような気がしたんですよ。

法務教官は、最初は仕事内容だけで考えてたんですけど、だんだん勤務地とか家庭を持った後のこととかを考えだしました。法務教官の勤務地って、女子は全国に7箇所くらいしかなくて、北陸中部だったら名古屋で、他は、そこから一気にとんで大阪の交野か東広島なんかが勤務地なんですよ。転勤もあるし、勤務時間も変わっている。それに、法務教官の人が集まるネットの掲示板を見ているといろんな書き込みがあって、「法務教官の存在は20年は遅れている」とかあって、サイトだけで判断できるのは一面だと思うんですけど、こんな面もあるのかとモチベーションが落ちてきたんですね。それが2年生の終わりごろです。揺れてたというか集中してなかったですね。

3年生は、実は2年の後期に教職を取るのをやめてしまったんですが、大学の事務の人に相談したら、「法務教官をやめて教員になる人も多いから、絶対に教職をとれ」って勧められて、また教職を取り始めたんです。2年生で取らなかった分が3年生にきたので、月曜日から土曜日まで全部1限からあって、すごく忙しかったですね。そのときは、教師になろうとは思ってはいなかったんですけど、いつか役に立つかなというくらいで、取ろうと思ったんですよ。法務教官のことを考えると、教職を持っていると教育指導にも入れたりするので、やれることも広がるんです。木曜日は少年鑑別所に行って、土曜日はフリースペースに行って、その他にも国家Ⅱ種の政治とか経済とかの勉強もあって、毎日がいっぱいいっぱいって感じでした。忙しかったってことしか記憶にないです。

同時期に、田舎に帰るかどうかも考えましたね。まず一番大きかったのは2年の終わりに祖父が倒れて、何週間か帰って看病をしていたときに、いろんな感情が湧き上がってきました。「親がこうなっちゃったら自分がみてあげなきゃな」とか、親も帰ってきて欲しいって思っていることとか感じましたし。それで、地元に残っている仲いい友達に会ったりすると、ちょうど都会不信になってた頃だったせいもあって、悩んだし、考えました。まだ結論は出ていないです。

就職について

就活してみて、「どこの会社に入ってもそれなりにがんばって充実できるんじゃないかな」っていうふうに思ったり、「高卒でもできる仕事はやっぱり嫌だな」と思ったり。あと最近すごく思うのが、一生同じ仕事でなくてもいいのかなってことで、いままでは「その仕事についたらずっとその仕事だ」と思ってたんですが、公務員は年齢制限があるけど、またやろうと思ったら受験できる仕事だから、一度社会に出て、やっぱりやりたいと思ったら、やったらいいかなって。就活して、結婚のこととか子育てのことも真剣に考えるようになりました。就活をはじめた3月くらいは勤務地のこととかすごくこだわっていて、全国転勤があると、結婚したときに続けづらいから、「関西を中心に展開している、関西に本社がある会社に行こう」と思っていました。それだったら結婚してからでも続けられると思ってたんですけど、最近、それだけにしぼったら決まらないかもって思うようになって。なるべく関西で住みたいですけどね。

彼氏は山口出身で、地元で先生をするのが夢なんですね。だから難しいです。でも、「京都で先生をするのも悪くないかな」と言っているのでも、それならわたしが関西勤務であれば、いっしょにいられる可能性が高くなるのかなって。でも、そんなことまで考えていたら、先のことなので、よくわからないですからね。とりあえず面接予約をしていろんなところに行って、バタバタしているって感じです。

最近、自分が何をしたいか考えたときに、「人に喜ばれることが身近に感じられることがいいな」というふうに思って、理学療養士とか、企業のなかでは福祉関係もいいなと考え始めました。

それで今は冗談半分で、「どこも決まらなかったら理学療養士の専門学校に行って勉強するのもいいな」と思っているんです。親は「あんたはおじいちゃんの看病をしているのを見ている、そういうのが向いているのがわかる」って言っていました。ずっと昔から世話好きの仕切り好きだったので、人の面倒をみるような仕事は向いているかもしれないです。親は冗談ぽく「医学部に行くより長くなる」って言っていますが、昔から「資格をとれ」っていうのが親の口癖だったので、長くはなるけれども、専門学校の3年も無駄じゃないって感じみたいです。そろそろ本当に決めなきゃだめなんですけど、いろいろ動いていくうちに、自然と、決まっていくなっていう気持ちもします。

約5年後、10年後、近未来の自分について

25歳の自分はどんな仕事をしていたとしても、少し上の立場に立っていたいなって思います。雑用じゃなくて、やりがいのあることができていたらいいな。そして、そろそろ結婚のことも考えている時期だと思います。

30歳は仕事を続けているかなあ。子供ができていたら続けているかはわからないですね。復帰はしたいと思っているとは思いますが、何年間かは休んでいる頃かなと思います。30代はイメージするのが難しいですね。子育てに明け暮れているかなあと思うし。

働くことはすごい楽しみ。「早く働かせてくれ、どこでもがんばるから」って思っていて、社会に出て認められたいっていう気持ちがあります。きっと、今まで曖昧にしてきたところを、はっきりさせなければならぬところに来ているんでしょうね。今までで一番悩んでいますね。

### 3) 宮腰英里 (平成16年3月25日インタビュー実施)

#### プロフィールと小中高生時代 (地元の環境) について

岐阜県岐阜市出身です。わたしの両親はともに教員で、4月から父は校長に母は教頭になります。きょうだいは兄が1人で、名古屋にある大学を出て、4月からメーカーに勤務する予定です。兄とわたしの性格は、なにごとにも積極的なところはよく似ているんですけど、まったくちがう人生を歩んでいます。兄は高校生の時に「親が堅い職業をやっていると……」という典型的な子になっちゃって、荒れて、いろいろあって、服飾の学校に入ったんですが、「やっぱり大学に行く」と言って進学し直しました。

わたしは地元で公立の小学校、中学校、高校と進学して、高校時代はとにかく友達が多かったです。歩いていたら全員としゃべれる感じ。学園祭で盛り上がったり、ライブハウスに行ったりもしていました。ただ、それはあくまで規則内でやっていたというか、自分の好きなことは譲らないけど、「やるべきこともしっかりやる」ということを、親とは約束していて、自分の人生にとってデメリットになることはしないという気持ちがありました。それは中学時代に兄の姿を見ていろいろと覚えることがあったので、自分はメリハリをつけてやろうと思っていたからだと思います。

#### 大学進学について

高校の時は、とにかく必死に勉強しました。心理学をやりたかったので、筑波大とか横国とか国立を目指してたんですが、センター試験で国語が果てしなく悪い点数だったので、筑波や横国には出願できなくて、金沢大を受けて、そこは受かりました。

私立は、わざわざ東京まで受けに行きたくなかったんです。関関同立なら名古屋の河合塾で受験できるので、そこで受験し、南山も含めて全部受かりました。そこで、さあ受かった国立と私

立のどこに行きますかということになって、すごく悩みました。金沢は教育学部に受かっていて、そこで心理学をやるという手もあったとは思いますが、なんだか国立で教育学部だったら教師になる道に限定されてしまう気がしてしまっただけです。その当時、わたしは教員にはなりたくなかったんですよ。うちの両親は「自分で決めなさい」と言いました。わたしは悩んで、教員になりたくないし、住む土地としての魅力も京都に感じたので、同志社に来ました。

高校の時は30歳くらいの自分に対して、大学院とか行って、心理学を勉強してカウンセラーになりたいなって思っていました。とにかく人の役に立ちたいって。カウンセラーがはやっていたのもあって、わたしの友達にも筑波の心理に入った子もいるし、神大の発達科学に入った子もいました。友達では、他には、外国語を専攻する子、外大に進学する子が多かったですね。専門性をつけてやっていこうっていう子が多かったんですかね。

#### 大学生活について

1年の最初は他の大学に編入してやるって思っていました。センターの失敗をとりかえそうというか、それに、入学当初はなんかまわりのモチベーションの低さに腹が立ってしまって、ホント失望しました。テスト前になると真剣になりだす子とか、ノートを借りる子とか見ると、「大学に何しに来てるんだ。その態度はなんだ」ってなっていました。

それに、先生でいい加減な人にも腹が立ちました。それこそ1回も講義に出ずに、講義ノートだけを買っても試験をとおるような授業だと、こっちは必死で聞いているのに、それはなんなんだと思ってしまうわけですよ。適当に成績をつけているとしか思えない人もいました。そんなふうに、1年生2年生の時は、おこってばかりしてた気がします。

3年生の時は、ふつうはだいたいぶんラクになると思うんですが、私は週に6日大学にきていました。4月に事務を説得して、英文の学科長にも会って、英語の教職の免許を取れるとわかった瞬間、「よっしゃ、道が開けた。教師になろう」と思ったんですが、その気持ちもだんだんかわっていきました。

大学っていろんなところから人が来てるじゃないですか。だからいろんな人生があるんだってわかるじゃないですか。今まで自分が10代のときには、銀行や教員には「こう歩んだら人生うまくいく」とか「今の生活レベルを落とさずにやれる」「それ以上を目指していける」という、安定か、もしくは上昇のイメージがあったわけで、それはそれでいいなと思っていたんです。でも、いろんな人とかかかわると、さまざまな情報が入ってくるわけですよ。特に就活をしていると、「こんな仕事があったんや」という発見があります。特にやってみておもしろそうな広告業やマスコミはそうですよね。田舎にいた頃には「そういう仕事は、どうせ手が届かないところのものだ」と思っていたところもありました。「どうせ少ししか採用しないのに、そんなのを目指してもしょうがない、それなら田舎に帰って教員とか公務員とかした方が確実だ」って思ってたところがあります。そっちはある程度、どんな仕事をするのかとか、先のこととかも、見えているじゃないですか。でも最近では田舎に帰ると安定しているかもしれないけど、私の向上心は満たされないかとも思ったりもしています。

でも都会で仕事をしたとしても、結婚して子供ができれば、その時は絶対に田舎に戻ろうと思っているところがあります。わたしにとって、「結婚」「子供」ってすごく大きいことなんですよ。絶対にはずせないことだけど、でも仕事はやめたくなくて、続けていきたい、適当も嫌なんです。家事も完璧にやりたいし、ひとつの会社にはこだわらないでキャリアアップしていけたらなって思ってるんです。

基本的にわたしは今付き合っている人と結婚できたらなって思っています。同じ学年で、同じ高校出身なので、もう5年くらい付き合っているんですよ。なので、その人もローカルな同じような道を歩んできてるんです。大学は立命館でたまたま一緒に出てきて、いま就職で選択の最中で、その人の進路によるというか、その人の選択がわたしの選択にも影響を与えるだろうなって思います。

#### 就職について

結局は自分の行きたい会社だけ受けて、それでダメだったら1年くらい留学して、元々のって言ったら変なんですけど、親も教師だし、教員になる道を選ぼうかな、と。彼氏の選ぶ道にもよるんですけど、彼氏は都銀か地銀かで迷っているんですね。わたしたちはきつと離れたらダメになるっていうのはわかっているんで、仕事で全国を飛び回って、お互いが別々のことをし始めたら、きつと無理だろうな、と。だからお互い地元に戻ったら、続くんじゃないかと思っているんです。家賃は浮くし、生活費はいらぬし、家は近所だし、そうやって考えると、岐阜で就職するのもいいなと思ったりします。

いま就職する段階になって、青学に行った子も、慶応に行った子も、神戸に行った子も、立命行った子も、だいたい「地元っていいよね」って言います。ひとり、お茶の水の子は「わたしはやっぱ東京だわ」って言っています。わたしどちらの気持ちも理解できます。たぶん、地元がいいか都会がいいかという気持ちは、みんな半々くらい持っていて、どちらかが多少優勢かっていうくらいなんですよ。でも、地元に戻ったら、本当に職がないんですよ。だから地元に戻るといのは「名古屋で就職したい」ということなんですよ。岐阜と名古屋なら近いし、同じ雰囲気なかで生活できますから。就職先は地銀を目指している子が多いですね。

でも、世界を股にかけてるなというような人を見ちゃうと、勝ち負けじゃないんですが、自分も学生時代は誰にも負けなくらいがんばってきたし、遊んでた人が自分より有名な企業に就職したりするのが納得いかないんですよ。特に同じ企業にエントリーしているのに、男女で差があることに納得がいきません。成績はわたしのほうが断然いいのに、入ったら絶対に自信があるのに、男には連絡があって、わたしにはない。会社のその理不尽さに腹が立つんです。おかしい話じゃないですか。

高校時代には夢を見てたんですよ。今の時代は男女平等だし、女の子も同じようにチャンスがあるって思ってたんです。でも就職活動してみると、歴然と差があって、「何が能力主義なんだ」って思ってしまう。なんか社会とか企業とかには「女の子やし、結婚もあるんやし、そこまでせんでええやん」という考えがあるように思うんです。わたしが必死こいてがんばろうと思っても、就活してて会う子は絶対「いずれわたしも結婚することを考えたらさあ」とか言うんですよ。わたしだって絶対に結婚はしたいし、結婚のことは考えてますよ。でも、それがなんで女のリスクになるのかがわからない。キャリアアップしたいのに、力をつけさせてくれないと云うか、例えば面接で「総合職でいきたい」と言ったときに、嫌みな人事に「どうせ辞めるんでしょ。じゃあ一般職でいいじゃない」と言われて、その時点でこの会社はダメだな、と。男とか女とか、そういう色眼鏡で見ている人事に腹が立つ。女はやめる、使えない、取らない、みたいな。

NPOとかボランティアをしている女性って優秀な人が多いじゃないですか。企業じゃなくてそういうところでしか女性の力を活かさない、そんな社会全体に腹が立ちます。なんでわかんないんでしょうね。だから、面接に行ってもむかつくんですけど、聞けないし言えないじゃないですか。「女性の離職率はどうなってるんですか」とか聞く子もいるんですけど、わたしとしては、

そういうことに興味はあるんだけど、同じフィールドで戦いたいのがゆえに聞けないと言うか、聞きたいたいののに、それができない。社会に出るのがって厳しいなって思ったりするんです。少子化っていうので補助金を出したり、色々とするじゃないですか。そういうことをする前に、もっと安心して産めるような制度というか、結婚・出産が仕事と対立して存在しないですむように、バランスを取ってやれるといいんですが、結局、そうなる公務員とか教員とかになってしまうんですよ。だから両親がわたしに教員を勧める気持ちはよく理解できるんですよ。

そんななかでもがんばってきたことを評価して内定をくれた会社も1社あったんですよ。「最近『がんばったことはサークル、バイト』という人が多いのに、『勉強です』というのはめずらしいですね」と言われて、評価してくれたんですね。それは嬉しいことだったんですが、もっと上をというか……。内定をくれたのは公文です。女性にも優しい企業だと言われているし、いいんですが、公文という、教育というフィールドから自分が出ていないことに、満足がいないというか、もっと違った形で社会のなかで自分の力を試したいというのがあるんですよ。そういった企業という形で教育にかかわるのなら、それよりも地元に戻って教員になるほうが、身近な人に影響を与えられるし、転勤も少なくてもいいかなあと思うんです。総合職をやるならば、転居を伴ったり、しんどかったりしても、自分に力がついていっているという実感が持てるようなボーダーラインがあるような気がするんです。公文は、私の中のそのボーダーラインより下なんです。でも内定がもらえたことは、自分が学生時代にやってきたことが評価されたという自信になったし、最終的には教員になるとしても、認めてもらったという証明になったと思います。約5年後、10年後、近未来の自分について

5年後のわたしは何をしているかなと考えたら、25歳ですよ。就活の選択が人生の分かれ目だと思うんですけど、教員になってたら、彼も銀行かなんかに就職していて、そろそろ結婚しようかなと考えている頃だと思います。もしくは企業に就職していたら、とうてい結婚なんて考えられないでしょうね。いいパートナーができていても、最初に就職した企業でずっといる気はないんで、例えば夢の夢ですけど、MBAかなんかで留学して、新しいことを勉強したり、時間を活用して新しいスキルを身につけようとしていると思います。きっと社会に出たら、いま感じているよりもずっと昇進とかしたくなるはずだから、その時に切り札として出せるものを作っておきたいんです。就活のときにも思ったんですけど、これだけやれますという具体的な証明ができてこそ、初めて男女平等に見てもらえるのかなと。25歳は、まだ疲れたとか、挫折感とかを味わったりしてない頃かなと思う。また、そうありたいと思います。

さらに5年後の30歳のわたしは、教員になっているのなら、自分の子供は産んでいたいと思います。そして、たとえ教員であっても「普通の先生とはちょっと違うな」って思われていたい。妥協で教員になったというようにはしたくないから、「英語の発音がすごいきれい」とか「あの先生から英語を学んで良かった」とか「生き方として格好いいよね」とか尊敬される自分でありたいです。学校の教師という枠でとらえたくないんですよ。常に自分自身の成長のために投資していたいんです。結婚しても子供がいてもそうありたい。会社に勤めているというバージョンで言ったら、そろそろ結婚しようかなと思っているだろうし、その相手もわたしの仕事に理解の人じゃなかったら、絶対に結婚しない。家族ができていても、30歳になっても、自分に投資し続けるだろうな。常にリメイクされていきたいというか、わたしはこういうのじゃないかなって決めてしまいたくないというか、そういう気持ちがあります。

#### 4. おわりに

前節では、地方出身で、現在、都市の大学に通う3人の女子学生にインタビューした結果について示した。そこには、3人に共通することも、まったく異なることも存在している。はじめにでも述べたが、彼女らのこれからの10年間には、「社会」的な、そして「個人」的な、さまざまな出来事がおこることだろう。あらためていうまでもなく、それらは、「社会」的であると同時に「個人」的なものであり、「個人」的であると同時に「社会」的なものである。そこにも、3人に共通することも異なることもあるだろう。筆者は、それらをとらえることを通して、20代の女性の等身大の日常について考察していきたいと考えている。それは、また、インフォーマントの性質上、当然、「地方」や「都市」について考えることにもなるだろう。

本稿では、研究序説的に、研究計画の提示、インフォーマントの紹介を行ったが、次稿からは、これからの10年間、それぞれの年に彼女らがむきあうことになった出来事やライフイベントについて、社会学的にとらえるということを行っていく。

#### 注

- 1) わが国では、トラッキング研究は1970～80年代から行われてきているが、最近では新たな視点からの研究もされてきている。性役割観に基づく経路分化メカニズムを考察したジェンダートラック論（中西1998）、「総合選抜制」等の新しいタイプの高校におけるトラッキング研究（田中1999、荒川2001）やその延長線上にあるカリキュラムから進路選択をとらえようとしたカリキュラム・トラック論（荒牧2003）など、時代が求める新しい視点が次々と提出され、その後、それらの研究の蓄積も進んでいる。けれども、時代が求めるものにはならないためか、地方という視点を取り入れたトラッキング論は、ここでふれた吉川（2001）や工藤（2004b）くらいしかない。
- 2) ここでの同じ専攻というのは教育学専攻を指すのであるが、本稿であつかう3人の学生以外にも、教育学専攻には、他の専攻よりも、地方出身者が多くいるようである。「教育」という言葉には、地方の（優秀な）高校生にとって、何か特別なイメージを抱かせるものがあるのかもしれない。このことは、本稿とも関わる興味深い話題であるので、機会をあらためて考察してみたい。

#### 参考文献

- 荒川葉、「高校の個別化・多様化政策と生徒の進路意識の変容—新たな選抜・配分メカニズムの誕生」『教育社会学研究』(68), 2001
- 荒牧草平、「現代都市高校生におけるカリキュラム・トラッキング」『教育社会学研究』(73), 2003
- 吉川徹、『学歴社会のローカルトラック』世界思想社, 2001
- 工藤保則、「地域性とライフコース展望—中学生の『職業意識』『ジェンダー意識』を手がかりにして」『仁愛大学研究紀要』(2), 2004a
- , 「ネットワークとトラッキング」『人間学研究』(3), 2004b
- 中西祐子、『ジェンダー・トラック—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社, 1998
- 田中葉, 「『総合選抜制高校』科目選択性の変容過程に関する実証的研究—自由な科目選択の幻想」『教育社会学研究』(64), 1999

付記 本稿は平成14年度仁愛大学共同研究（「中高生の進路形成の意識と実態に関する実証的研究」）の研究成果の一部である。